津守真・久保いと・本田和子 共著
幼稚園の歴史

古木弘造

この書物は、第一部、欧州における幼児教育の発達――フレーベルまで、第二部、フレーベル以後の幼稚園――米国における幼稚園の発達を中心として、第三部、日本における幼稚園の進展、の三部から構成されている。

書名の示すとおり、もっぱら幼稚園の歴史であって、第一部で、幼稚園創設にいたるまでの幼児教育思想及び仏・英両国における幼稚園以外の幼児教育機関に言及しているほかは、幼稚園に限定して、その発達のあとを克明に辿った、すぐれた力作である。

従来、幼児教育の歴史を扱った文献は極めて数がすくなかった。ことに、ひろく世界的視野に立つ歴史については、わが国では、その文献が文字どおり皆無という状態であった。それは、恐らく、一つには、幼児教育研究者が未だ数すくないということにもよるであろうが、また一つには、幼児教育については、年長児童の教育に比し、母親及び家庭の生活と密着したところがより多くあるために、それぞれの国の国民生活についての理解がとくに重要であり、それによる困難があるためであろう。

こういう事情の下で、ひろく世界の幼稚園の発達のあとを究明された本書が出たことは幼児教育研究の進歩のため、大きな意義をもつものであり、きわめて高く評価されるべきものと思う。

しかも、全巻を通じて、忠実、正確を期し、着実な研究の積み重ねであるという感じを強く受け、著者の労作に対して敬意を表せずにはいられない。

この書物で、とくにすばらしいと思ったところは、まず、第二部第一章の米国における幼稚園運動及び第二章のフレーベル批判と新教育の進展（一）（二）（三）（四）である。ひろく文献を採用しながら極めて要領よくまとめられており、非常に多く教えられた。もし欲をいうならば、一九二〇年代以後の幼稚園の体質改善について（A・ゲゼル、I・フォレスト、N・S・S・E、の年報などにある他の幼児教育機関との相互作用による）もう少し言及して下さればもっとよかったのにと思うが。

つぎに注目されるのは、第三部の幼稚園令の歩み以後における幼稚園の保育の実際について、及びわが国幼稚園の形成に力をつくした人びとについてである。ここには、いくつかの新らしい貴重な資料がとり入れられている。

この書物に文句をつけるとしても、全巻を通じて、わが国幼稚園の当面している問題（たとえば、保育所や家庭との関係、小学校との連絡、保育内容のあり方、両親との関係などなど）との関連に、アクセントをおいてくれたら、読者は、一層よく理解でき、一層深い関心を持つことができたのではないか、と思うこと位である。

ただ小さい事であるが、説明の不足のため誤解を招くおそれがあるかと思われた点が一、二目にとまったが、（第一部第二章のうち、就学育前教育であったオーエンの幼児学校と義務教（五―十五才）の段階に入っていて、就学前教育でないところの現代の幼児学校（英国の就学前教育機関は保育学校）との区別が説明されていないこと。オーベルランのあみもの学校が、いつ、どうして消滅したか（普仏戦争による）それと註52の母親学校との関係が明らかにされていないこと）これは私の読み方の不足のためであるならば幸いである。

ともあれ、幼稚園の本質を理解し、その社会的意義を知るためにも、また今日の問題を解き、明日の指針をうるためにも、さらには先人の情熱と献身的努力による不滅の業績をしのぶためにも、ひろく幼稚園関係者の一読をすすめたい。

〈恒星社厚生閣発行
定価　三八〇円〉

（名古屋大学）